



五元集

下





是より別して務負を以
てその心は英雄乃臣を以
て馳走する所神妙也
叩境の条ありて第一
成るる一とて白綿つきの
放ちる東にお城山南ハ
立田西ハ穴生ハ有乳
乃鎮護を以て先一ツ
の教書を認め
治雞坊乃何某筆を
取て田饒の詞をかり蘇
秦の謀を顕して神明



納受の志を乃々しう
開の清水をうう
多水をうて頂禮
ううと

三十六合

春風心かられも引も家雞乃摩

二字と次

市節會ふををうの家の家雞乃底下

是よりをの音乃新半歌仙
乃左坐すのと鳴る空の天鶴

千麻をうをうの軍配い
曲をうをう

右介ううたのうの春を
うをうすて旅丁とわうと
なる家雞乃立片す
北雞乃朝々あう押さふ
留主居役付るを更切て
附る其身の立居重く大
声をうて勤番をう也
道戯うあひる傳兵衛と
ひー乃笑ひ
うう

廿七合

桃花雨をば竹の葉乃みくは足其角

二字よみ

五六間述てい返に尾波の

し字よみ

清明の節大雨をきりて思ふ
敗軍次稻麻竹葦に入乱
やれぬの志より尾波よりかたり
何ものゝ志よりなん落書

雞去昼竹葉とりふ句を書

捨より是い上山の傍雪乃

磯白千犬走生梅花とらふ

對ちあるを時よりて用ひる

とらふ桃花雨ふるなり小羽翼

ハ醜しとてさる也晴て後

男浪乃よりて返しなからも

こゝ尾をるなりは尾花浪

乃新立とてゆひさるれ侍る

廿八合

白綿付乃黒て仕て取れ巳日や

乙字

桃節つるをほとけり枚の埒百之

屯

果出乃男白綾のふるとい

片けてやんと出づれいづれ願角
カミヤあるい酒陶氏とんゆ
立髪枝乃葉にもふみちう胴骨
つんぐりといひ叩斗樽のさくれく
うさうさう桃花の酔はれんとて乃
日の精を極力量いづれらん
卅九合

くいづれ胴匠といふ鳥甲
捕距此と云

後閑子色並をなと次擲もか素琴
し字と云
中入しと云なりなるふみ房乃

後閑とは心得ぬ業也富士の煙
乃かひやるぬらん力かひなく歯ふみ
きりきりし北離晨夜きりし
アサハといふこととて伝へ伝へ象も
うく片やうき鹿必ふとといふ詞を
あつてはし擲も心をうけてはし
しむるなり力乃出る寂中なるを
四十合

茶筌尾中盤を乃くいづれ習魚
左右し字
あつてはし當にしりも距は其角

茶籠髪にうろろ屋にうろろ
二十番乃ちうろも手弱き
方也何てかうろ雑言のうろ
崩口なるうろとそ持とん
四十一合

鼻うろも味方へ引や番 椒 雪

油の殿空餅いとうろ庭草
二字
嚴お乃水舌うろ三伏の番椒
に鼻の汗次辛烈乃氣忽と
頂平へるておはる血あると

男寒相撲急うろあけ
味方へるうろもうろあけ
空餅いとうろ次もあけ
それいなり乃心うけをせいより
何けて本意をもせ
ハッ立七ッ起ハ関乃東の兵
叩十二合

兵と戦もいれとト、呼ひ何
二字

足田鶴乃戦口乃負て勝
桃李不言乃詩兵と褒美の上

うい州本ををいけい言誠
かーげ家トこともひ出されて
棧鋪より此花をいふるなり
足田の所の中東ハ伊勢の国
是乃裏ハありきいあふるなり慈鎮
はふよせても洗ひはりなり
成乃高上松詞を置れり
海つくろの法トともいそと
戦れともいひつけ侍ると
きいあふるなりはの海をいふ
緒をいふるなり評義あり
伊家乃ん世田ありいなる

卯十三合

いとめき木乃芽をいふ 距八 右此

胡葱はあふも有り 杭古岡

是彼引用ゆふも有り

雞乃坊主ありる若なり 岡指

先蹤正 ちれいあふるなり

垣をいふる 岡をいふるなり

ちいふなり ちいふなり

右の時節お應乃あふい州也

負ふ味をさるるとりも
いふき巧言せ方の腹貶
ふをそいけ酢乃過きると
言ふれぬるをいれども

破味増

井四合

ハ乃字やさる寄事て聲醒

左右しきと

浦利を母たひるぬれ註判ハ焉子

酔といひさるとりあ好悪の
詞をいひさるるなりあも也

未冠れりあるに距を未なり
ひあもつを得自然なり
めしひあふ入河津殿の侍も
一万箱王母のふり甘母房を
備えて母衣より羽袴をきせ
うたふ焚燗をもあそぶ
あとの了り

卯十五合

血盲乃幾夜に掃きぬ密掛簾棹孤

也

屋宇も緋挑めぬてうーいう百猿
二字なり

乃反ふれり関路のるも
声にす申
卯十七合

足病乃かいは事や一 甯 疲 花月
乙字

朱冠癰に因つ三月待れり
烏医師の曰足やみ乃いし手
甯折失盡てさふ方か
是當分乃弱を望ハ手ありふ
あかろるつら冠癰希有に
一ろ六ヶ補病の常皇を病

鷹氣鬱に寒苦烏亂を乃
あしひ良藥を得るなり此を
可し此病はもと漢家乃
あし至癰死の膏を乃
つ多をもるるあし一の也
去ろく命運を全し
かすねて軍を乃とも
四十八合

後を蹴て巴を負し悟気 喰 筆分
乙字
雞 能 二人 靜を合とやり
戴冠文なり

此北負る子やしな七強の中
道もくさくさなる山崎路
谷もはるる懐あつた巴原
河もくさくさなる瀬
横瀬くさく振興あつた栗原
乃ちあつた放たれて後いつ
はくさく其場もくさく
くさくあつた三芳野の奥
大津島又放たれて美羅あり
穴徒あつたくさく
影を作らるくさく
台なるくさく野なるくさく

丁と二人静

卯十九日

沼津より足高山へ大樽 主朝

屯とん

山あつたやうなり雞乃

二文字

清く関取乃血脉原吉あを
心もくさく宿るあつた利ノ
共やみかともくさく
名もくさく君も同くくさく
をくさくて目もくさくのくさく
くさく乃くさくをくさく人くさく合を

侍ら芳野唐土より名を
翹ホ薰物一紅粉化粧一
花美ふ人せ心をあはれ
迷をとりまは後法度ふ成と
ちもみち放ちやりぬの
帝小の巻ふ
身のうしろをあげくおろすゆるね
とらかきまてと音もあはれなる
うつをみ乃奇也此心よか
と

五十合

後口推すも啄も嘴て門

戴冠文トス

傳大士を雞驚ふとひし合飲以

今ハ寺々乃雞を召ぬ推敲
三年の執り可て推ハ力啄
ハ品也韓退之是を相件
て以鳥鳴春と世上ハ鳴るを
りまし輪藏乃三影ハ
あきあきとん訓てを魚ハ
きいハ場也ハとんてを魚ハ
乃狂ひハとんて笑ハ

五十一合

拍手あつ色をきこけハ具負 底下

左右屯と云

尾もる影隠し けり 故 雞 百之

社頭、雞かやき寄合此

を去つたんとあ拍手、松柏の

霜の後をきこけも各浪人

角刀をれば笑ふものぬ

神山乃拍手平手うらと云

幾番も

五十二合

唯 ねの血臭ひ 嘴をけり 事 何 雪花

五字

願 畢凡 赤きり酒乃 いと云 雪花

捕距武

片も叶てしも 是 高し かる 業を

得て 舞 舞を とし 瀧と云 傘

り 子 子と云 ききもも 云 ぬ

目 くら 束冠も は 乃と云 次

出 けり 願 ぬらり 今ハ云 人 氏

此 鬼 酒を 力と云 共 かく 佛 力

と云 神 力と云 けり と云 も

あふ 云と云

五十三合

凡玉又浮ぬ泥と忽ちなりし勝

左右乙字

筋浦乃破軍をくわ花の軍志北

凡玉あけをくわ浮身泥んで勝

ひ橋水際くわてんくわ筋浦

は中浦小星なりけりきやんこ

手合乃くわやう左切あるを

花と々梅花乃陣をくわす

とくや

五十四合

引色も日此の煤乃時鶴乞

五字

相羅羅乃勢を越や花曇 習奥

引色も日此の煤乃時鶴乞

月色とかく松詞正廣り

日頃の神とくひひ引合を

向上なりはくは羅入曉を唱ふ

歌声明王の眸を驚きす

あまふお還るは花軍

一も千を合とくははたも

くもるを

五十五合

雞頭乃追手の染めの紅をあら 芥分

也

土餅より豆腐よりしる君よ歌 鳥子

二對乃名目ハ立あつたねうて
はあつたね所なり是なり

雞頭乃同しと一の紅葉負

とあつた其品とそれねうて

紅葉鳥鹿のわさるるこころ

新衣の因者場を食ひてを

乃うとあつたふもあつた力業

角力乃外他もあつた土

餅よりあつた豆腐のねうて

菖蒲の白きもあつた

五十六合

時下後悔もあつた蹴合の時 百様

と字右二字

堀ゆり眼を瞞の鉄輪お

あつたあつた揮ふふにうなり

て睡りたる物目をさうた

可度い也い食つきて

時下いふををあつた

空暇の傍負後好する
三足のわし輪を世の中より
あつたものであつても
力をこめてみぬ中古野山の三
と云ふの片腕を切らざる
皮利かきとてんる
鋸を肘の福より引切て捨
つる素門とて片枝と
此意地はやか
五十七合

欠似千亦乃根撰や若手合其角

砂水おきり息も古湘江

抽距武

是乃亦乃根とて
アけ負後たてし道理古湘江
昔はより唐織を
邪慢る慢る手つて三番
難

五十八合

雌々毛虫と捌く羽癖は素

矣

いさひ乃別まや唱ふ昼下り 雪花

潜確類書に雞ハ蜈蚣を以
酒に酔ひ桑椹酒を以て
其毒醉真乃羽癖をつく
後ひもくしを食ふるを
く左へ廻るやや蒲白
あふもとかうらん
たは樂をがも知るとん
早天つら乃ん物待何卧
しるも其角力揃ひいさな
ちるも別まは是

五十元合

風負乃つより大なる一個其角

也右乙

猪甲あふ独いぬや雄乃役

甲の老と新毛をつまみよる鏡
首隠波河鬼也こまいに
冬ゆきよの赤乃落るやうに
野み伏山や即る白ちの原毛
にそてかつの爪をかこもるおと
寵竟の左忽にぬおち一つ落る
舞のふそてすきあふもさうそ

飄鷺くくくる風情

苦——

六十名

絢突乃時をも同をんぞく独樂

戴冠文と次右五字トス

ちち王の小结の進ふもや 鷺 白樺

韋駄天の名をいふこと
引廻しともあつ下界へつり投下
ちいなるきつ胸を突て絶
入る溜まり廻る大独樂乃
うしろに泡をききうしろを

花の惣一

ちいけいもの辯難合さうね
てきさうて肝をききうしろを
六十一台

鷺の一厥から出て鳥いさ——

五字

噫にもいさういさう鳥伯樂が毎雨

七乃の前あはれをうけあうく
真黒さをも瞞関内をも乃
佛意をいふあり作——を
うけけ乃をもあう世界

川中島乃牛合とんともや
龍而乃成漢楚の争ひ是
を末世の咄とよるる
六十三合

驛タラ白をまうひふ矢壺くく辰下
乙字

抱分て凡乃洗足を、雖れ酒百之
たとい箭合也をのこりく
羽に扎ちつあて枝をさく
あちちのるこもあいに
手拂りつあちち喰ふ

乱きれい抱分くも
去うふ所のすをんと酒
ひしに成くはつと
歪者あちち心さ
油乃大敵
六十叩合

埒ちり乃いさあや桃乃花振ひ立朝
乙字

碁盤もいさ函谷、彌三五郎
埒ちり乃いさあや桃乃花振ひ立朝
他の悪黨をも次宵くもの宵

二聲ハ声の觸頭あるなり一有
孟嘗君の千のちりしきむさう
一に廿千あると云はれし
千をうつりし雞術 三千の
容成鼓よりさしを 戯沈
人取り名を所を飛彈乃
撮と受領を流しなり
昔のそつちを聲をさかり今乃
いふみハ形を工にむさう秘廣
なる例もみても實果の
史記のものとぬるなり
鶴ひし是ハ鶏印なり

羽多ハ羽形なり

難波ハ名二羽とも番一

六十五合

尾狂ハお強と云はれ 逆毛ハ

左右ハ字

難廻ハ浅黄あわて 月士軍 雪花

尾狂ハお強と云はれ

雞乃御ハお強と云はれ 逆毛ハ

此句と云ふのも件と云ふ事練
あも中ハ也尾狂ハお強と云はれ
あつちハ是をねと云はれ

くさくさは首尾十分なるを
も十五年以前乃若氣りて
とさる取かつ
丁度よくあるもあつた鶏
口とあつても牛後とあつた
あつたといふ詞つたを
鳥主も歩損浅中を廻
表裏よく仕立榮へる心の
濃きうはあつたあつた
六十六合

撮距小荷試奉行小隠きり習奥
乙子年

くさくさをあつたといふに
拂

軍旗乃中聞つたといふ
書片のうらな中も小荷

駄

からけの介候乃中の此陣
つたといふつたといふ
舞鶴

くさくさをあつた

坂落下師曹司るハ主
得たといふハは損す
かりとさるくさくさを
経たるといふとさる

三千騎とあると先かけて落禪
拂ふとる玉落すれども理りこ
夜軍いかにとて是を分目
の軍とある

秘傳なりと云ふ

六十七合

力尾の旗をひらきむねをみ
二字

なほの番とあるく御後か
緒開き音を合と味方乃糸冠
とあるとあるとあるとあると

収りの舞羽をひらきと起る
あつた濁をそれとむねの一連
力尾の白旗をひらきとある
とあるとあるとあるとあると
関乃の神乃乃御前
謹上再拜一奉
六十八合

陸奥殿乃鑑とあるとあると合

五字
おかし
おかし
二字
白足乃乃先陣後陣を

可き事ありきも其のふり負
出ても一詞なり其のふり
其社はさふりて日士家
ありてり亦老て心まゐ
て御陣屋ももろひ相撲
をもろひ踊るにてもさ
ありてり其れは一条目の剣札
をさるゝ叔俵より内へ入る
うへにてもさるゝさるゝ
とも多かれを評するに
六十九合

可士乃新もよするも

戴冠文

火啄やれあさつに臆病も毎兩

二字

落足半負者あつて馬の
蹄まついてちりくをさるゝ
さるゝ鮠乃尾をも火乃星
のさるゝいせ也慈悲心仏
法僧のさるゝけもさるゝ三井
あつていせは月影の鳥
啼てあつては満所これ
篝火消くさるゝいせ

乃の身しむる焼焚の難峯は
おのゝろくはあつて一嘆
て寒食乃家を乞つて
身乃上いふもさきをしる
異国より火あすむるも何
今此生鳥もあは尿を山
とらて柵を恨み肉を大根
わしと銀杏を刻おきて
前世乃其業因をいつて
人乃その道をせめて涙の
なすくはあつてひのちも
あつてはるまじ

七十合

一番乃勝を佐久間、吹流、其角

五字

も、貝のかく次難乃十二揃

諫鼓苔深、治雞坊、
塵靜也とりあつて、
湯神の力をあはれ、
乃奈をもつて、
例年、
戸関をきれ、
も、貝十二隠、貝十二、

務員を決て受十二のかり
勢あり此受委細きなり
然の夜は千直をておるなり
ともておるなりておるなり
なりては司を貝我桶中
ゆゑに銀の箱弓に袋お水
引をとりて鳥の跡を實
なり正木のかつて永
なりては鳥の籠なり一時は
鼓をとりておるなり

鳥沙汰曰

美母二年五月二日東山乃
仙洞より雞台よりなり
公卿待從僧徒より北面の輩
常に祇候なり老も左右を
とりては眼を賢ふなりて
なりては月ひは尺乃銀星
なる橋樹薔薇牡丹山吹乃
作玉花をとりて伶人
衆集りて春閑なる御堂
の山乃青山なりとてなり

箏箏を吹和琴を去るを
嗟歎乃舞樂をねりて
板両方乃雞を合あり

一番

左 右衛門督乃鳥字無名記

右 五條大納言の鳥字千代丸

以上十二番左衛門督乃勝六番
と記す奇々舞妓與遊下
絶ふ此の孟を勸む記を
放宴するといふも万代乃

義談を傳ふ黄昏了

あつてなるは是を此事

中御門乃左大臣殿乃侍

つて奉り人經房

朝臣書奉りたる也具代

乃記を合を傳ふなり

何れは是なる也

三 左衛門督乃鳥字無名記

花乃の後伝を

唐子ハ合する也

左右總計

麗人

二句

五字

十句

三字散

十八句

二字

卅六句

雁形乙

卅二羽

屯

十六距

寶晉齋集

